

特別支援学校（知的障害）における自閉症教育の取組状況と課題

—各学部における自閉症のある子どもの在籍状況と自閉症教育の取組—

○柳澤 亜希子 西村 崇宏 李 熙馥 村井 敬太郎

(独立行政法人国立特別支援教育総合研究所)

KEY WORDS: 特別支援学校（知的障害） 自閉症教育 在籍状況

1. 目的

2001年に、知的障害と自閉症の違いを考慮して自閉症の特性に応じた教育の必要性が示されて以降、文部科学省の研究指定校を始めとする特別支援学校（知的障害）では、自閉症に特化あるいは対応した教育が検討・実施されてきた。本稿では、特別支援学校（知的障害）に在籍する自閉症のある子どもの在籍状況と、各学部での自閉症教育の取組状況及び課題について明らかにする。

2. 方法

(1) 対象：特別支援学校（知的障害）610校の各学部主事を対象とした。

(2) 調査方法：郵送法によるアンケート調査を実施した。

(3) 調査項目：在籍する自閉症のある子どもの障害者手帳の種類と程度、各学部での自閉症教育の取組状況、特性に応じた学習環境の工夫、自閉症に対応した取組の成果と課題について尋ねた。

(4) 倫理的配慮：本調査は、当研究所倫理審査委員会での承認を得て実施した。

(5) 調査時期：平成28年11月～12月

3. 結果

(1) 回答数及び回収率：490校より回答が得られ、回収率は80%であった。各学部の回答数は、幼稚部11校、小学部470校、中学部469校、高等部423校であった。

(2) 自閉症のある子どもの在籍状況：自閉症と医学的診断を受けている子どもは、幼稚部42名(72%)、小学部10,225名(45%)、中学部7,709名(41%)、高等部10,178名(31%)であった。

(3) 自閉症のある子どもの障害者手帳の所有状況：療育手帳については、幼稚部(55%)は、「中度」が半数以上であった。小学部(41%)と中学部(37%)は、「重度」が最も多かった。高等部は、「重度」(29%)、「中度」(25%)、「軽度」(29%)であった。また、中学部と高等部は、精神障害者保健福祉手帳を所有する生徒が、2～3%であった。

(4) 自閉症のある子どもに対する各学部での取組：各学部とも多かった取組は、「自閉症の特性を踏まえた学習環境を設定している」(94～95%)、「自閉症の特性を踏まえた教材・教具を活用している」(89～92%)、次いで「自閉症の特性に対応した指導内容を設定している」(65～71%)であった。一方、「自立活動の時間を位置付けている」(43～54%)、「実態把握(アセスメント)を定期的に行っている」(41～56%)、「時間割を工夫している」(27～50%)は、上記に比べて低い割合であった。

(5) 自閉症の特性に応じた学習環境の工夫：各学部とも「1日の予定や活動の見通しがつくようにスケジュールを提示している」(92～95%)、「私物や使用する道具等の片付ける場所を決めている」(65～83%)、「子どもが落ち着くための(クールダウンのための)スペースを設けている」(56～67%)であった。

(6) 自閉症に対応した取組の成果：いずれの学部も最も多く挙げられた成果は、「心理的に落ち着いて学校生活を送

ることができる」であった。次いで、「特性に合った環境を設定しやすい」、「指導目標や指導内容が明確になる」、「子どもの主体性を引き出しやすい」であった(図1)。

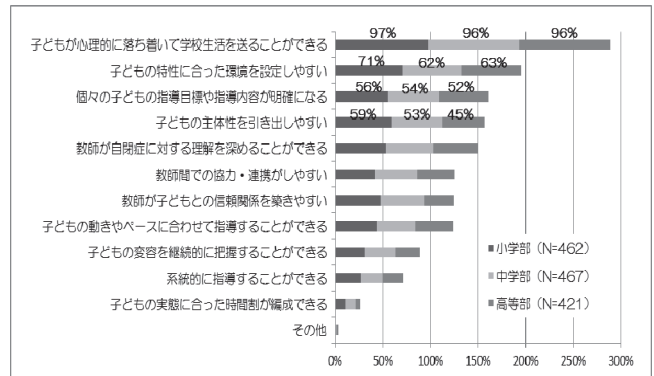


図1 自閉症のある子どもに対する各学部での取組の成果

(7) 自閉症に対応した取組の課題：いずれの学部も最も多く挙げられた課題は、「個別の対応が多くなる」であった。次いで、「特定の教師との関わりになりやすい」、「指導したこと全般が難しい」であった(図2)。

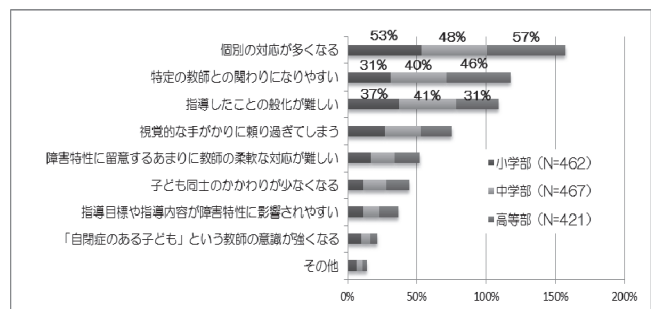


図2 自閉症のある子どもに対する各学部での取組の課題

4. 考察

平成16年に当研究所が実施した調査では、知的障害養護学校(当時)の各学部における自閉症の診断のある子どもの在籍率は幼稚部41%、小学部34%、中学部27%、高等部15%であった。この13年間、いずれの学部においても、自閉症のある子どもの在籍率が増加していることが明らかとなった。また、所有する障害者手帳の所有状況を見ると、高等部は知的障害の程度が多様であり、他学部に比べて「軽度」の生徒が多いことが示された。

自閉症教育の取組については、自閉症の特性を踏まえた学習環境の設定や工夫が定着していることが明らかとなった。取組の成果を踏まえると、子どもの心理的な安定を含めて自閉症の特性に応じることの必要性が、広く認識されていると考えられる。一方、個別の対応と特定の教師との関わりが課題であった。個別の対応の多さは、自閉症のある子どもの実態の多様性に応じていることが反映されていると考えられるが、同時に他者との関わりを拡大や一般化の難しさをもたらしていると推測される。(YANAGISAWA Akiko, NISHIMURA Takahiro, LEE Heebok, MURAI Keitaro)